
父親の肖像

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父親の肖像

【Nコード】

N0785S

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

不思議な力を持った「幸之助」と彼を大切に思う「克依」の物語。

（注意：この作品には犯罪絡み、残酷な描写、また、幼児虐待などの表現が含まれていますが、推進目的に書かれている訳ではありません。）

比較的軽度の表現に止めていますが、特に苦手な方は注意して読

まねることをお勧めします。
(

序（前書き）

（注意：この作品には犯罪絡み、残酷な描写、また、幼児虐待などの表現が含まれていますが、推進目的に書かれている訳ではありません。）

比較的軽度の表現に止めていますが、特に苦手な方は注意して読まれることをお勧めします。）

序

覚えている一番古い記憶は、古いアパートの天井だった。

薄暗い饅えたドブの匂いのする部屋。

感覚は既に麻痺して久しく、匂いも自分の身体に止まる虫も気にならない。自分が何を考えて誰を待っているのかもわからなかった。がちやり、とドアにかかった鍵が開く音が聞こえた。

ほんの一瞬光が差し込んで見えた。

「……くん？」

視界に入っただのは顔を顰めた男の人だった。

誰だったか覚えがない。

でも、その人を知っている気がする。

彼が少し目を開くと彼が息をのんだのが分かった。

警察、救急車。

そう叫んだのが聞こえた。

「大丈夫、もう大丈夫だからね」

そう言われても何のことだか分からなかった。

まだ三歳にも満たない幼い幸之助にはそれが何を意味するのか分からなかった。

小早川克依という男は小早川家の家長徹也とは甥と叔父の関係にある。克依の父であり、徹也の弟である礼人は榛名財閥の令嬢と結婚して克依が出来たものの元々遊び人の性格がたたってすぐに生活は破綻。別居生活をしている時に行方不明になり、現在もどこにいるのか分らない男だ。

榛名の母親も奔放な性格であり、すぐに克依の育児を放棄し、克依は小学校に上がると同時に徹也の養子となった。

榛名の長男として育てられていた克依はその日から小早川徹也の次男になり、兄と姉が出来た。

そんな複雑な生い立ちからも克依は曲がらずに育ち、品行方正、成績優秀で初等部でも一目を置かれる存在だった。家族から愛され、穏やかに育っていた克依だったが、自分が姉を追いつめていることは知らなかった。

養子である克依よりも優秀でなければならない。

母親は克依以外の兄弟達にそう教えてきたようだ。兄は元々克依より優秀であったため、何の問題も無かったが、姉の都は違った。優秀であり完璧であれと育てられた都は優秀な兄と弟に挟まれ精神的に追いつめられていった。姉は常に穏やかに振る舞っていたため、克依が姉の中にある狂気を知ったのは、彼女が新潟の鷹取家に嫁ぎ、子が出来た後のことだった。

まだ幼い子供に対して虐待ともとれるほどの躰をしていると知った時、克依は愕然とした。

姉はまるで自分をもう一度育て直すかのように自分がされたことと同じ事を息子に対して繰り返しているという。

話を聞いた時に何故を考えるよりもまず、自分が追いつめ、そし

て出来た子供も追いつめてしまったことを知ったが、克依に何かできるわけではなかった。

鷹取のことは鷹取の問題。

そう姉に突っぱねられれば養子という負い目のある克依には口を出せない問題になっていった。

どこかで贖罪という気持ちがあつたのだろう。

市原幸之助という子供のことを知った時、克依はすぐに会いたいと願った。姉へ、姉の子へ返せない分誰かに返したかった。

市原幸之助は克依の父が他の女性に生ませた克依の弟だった。

既に成人を過ぎた克依にとっては弟と言うよりは自分の息子と言つても過言ではない年齢だった。

「……虐待？」

幸之助に関する調査を依頼していた興信所の男は驚くような内容を口にした。

緊急だと朝早くに呼び出されて、男と一緒に車に飛び乗った克依はその言葉とこんな朝早くに呼び出された違和感とで酷く嫌な感覚を味わっていた。

彼は克依に冷静になれとでも言うように出来るだけ優しい声音で言う。

「あくまで近所でそう言う噂があると言うだけです。子供の泣き声は聞こえるけれど、見たことがない、時々尋常ではない鳴き声が聞こえたかと思えばびたりと止む、そう言う話を近所で良く聞きます」

「その、市原立花という女性は……」

「いわゆるキャバ嬢というやつですね。家にも殆ど帰っていないようなんです」

嫌な予感が頭をよぎる。

周囲で異臭の噂などないのか、と問いかけようとして止める。

それを聞いてしまえば嫌な予感が本当になるような気がしたのだ。

「……万が一の時のために、大家には連絡をとっています。我々が付く頃には鍵を持って来てくれているはず」

「万が一なんて……言わないでくれ」

克依は酷い胸騒ぎを覚えながらも冷静になるようにと言い聞かせた。

そんなことはない。

あるわけがない。

そんな酷いことは起こらない。

呪文のように繰り返すと、だんだんと冷静になっていく。克依は祈るような気持ちで手を握りしめた。

無事であつて欲しい。

まだ見ぬ弟のことを強く願った。

アパートの前に付くと既に大家らしき人が待機をしていた。その顔色は若干青ざめており、彼もまた良くない事を連想しているようだった。

大家と挨拶を交わしていると、奇妙な視線を感じて克依は視線を巡らせる。

二階の端の部屋の前に猫がいた。一匹だけではなく克依の位置から三匹くらいが確認できた。猫は何か心配事があるかのようにドアの前を行ったり来たりしながら鳴いている。その周囲には異常な程に烏や鳩といったその辺にいる鳥たちが集まり、どこかの飼いだちが盛んに吠えていた。

まるで、ここに何かがあるとでも訴えるように。

「あ、小早川さん！」

反射的に階段を駆け上がった克依を管理人と興信所の男が追いかける。

ドアの前にたむろしていた動物たちが克依の存在を認めると訴えかけるように一斉に鳴きだした。一種異様な光景だったが、せつぱ詰まっている情景とも見える。

猫がしきりにドアをひっかいた。

何度も繰り返ししていたのだろう。傷だらけになったドアには僅か血のようなものが付いている。猫の前足は爪が少しハゲかけていた。

動物たちの勢いに後押しされるように大家がドアの鍵を開く。

不法侵入を訴えられる覚悟で克依はドアを開く。

驚愕した。

そこは最早人の住むような環境ではなかった。

ドアをひっかいていた猫が慌てて中に入る。それを追うように克依も中に入った。キッチンと四畳半だけの小さな部屋。

その奥の引きっぱなしの布団の上に子供が転がっている。

光景がまるで映画のように映り、それが現実なのか否かも克依には判断できなかった。猫がしきりに子供の頬をなめている。

「…………… 幸之助、くん？」

膝を付いて呼びかけると、微かに子供が動いた。

老人を思わせるような虚ろな瞳の色は灰色をしている。

まるで死を覚悟した狼のようだと思った。

「警察と、救急車を！」

克依は叫ぶ。

そして、少年を抱き上げる。

細い、生きているのが不思議な程の軽さだった。

「大丈夫…………… もう大丈夫だからね」

その言葉は多分自分に言い聞かせたのだろう。

「施設になんて……入れるものか！」

徹也に言われて克依は声を荒げた。

父に引き取られて依頼、こんなふうになんて反発したのは初めてだっただろう。

そんな風な態度を見せた克依に対して、徹也は少し顔を顰めた。

「落ち着きなさい」

「あの子は僕の弟だ。施設に入れられると聞いて、落ち着いてなどいられません」

「私にとつてもあの子は甥御だよ、克依」

声を荒げる克依に対して、徹也は酷く冷静に答える。

「礼人は私の弟だし、礼人の子供であれば私が引き取ることもやぶさかではない。だが、克依、あの子はお前の時とは違い私生児だ」
頭に血が上る。

母親が結婚しているかいないかの違いで自分は引き取られたのだから。
うか。

今まで信頼し、期待に応えようと思ってきた父だけにその言葉に対する失望感が強い。克依は怒鳴りかけるが、言葉が出なかった。叫ぼうとしても喉の奥で詰まってしまうている。

ようやく出た言葉は酷く冷静で冷酷な言葉だった。

「小早川に嫡出でない子は要らないと言うことですか」

「……早く言ってしまうばそうだ」

目から鋭いものが出てきそうだった。

怒りを抑えて冷静な振りをする言う。

「……長い間、父と呼ばせて下さってありがとうございました。
僕は一人でも、あの子を引き取って育てます。小早川の縁から切っ

て下さい。僕は、子供一人守れない家なんかもう要りません」

「落ち着きなさい、克依」

「僕はいつだって冷静です」

そうは言ったもののとても冷静ではいられなかった。

腹の奥底が煮えかえったように熱い。

これは失望感からくるものだろうか。それとも怒りだろうか。

「よく考えなさい、克依。お前はもう既に小早川の一員として働き始めて久しい。増して榛名の家のこともある。お前が小早川から抜けると言うことはお前一人の問題ではないのだ」

「保身ですか？」

くすりと小馬鹿にするように笑う。

呆れる。

つまりは自分がいなくなれば僅かな榛名財閥との縁が切れてしまふというのだ。そのために自分を引き取ったのだろう。

いままで信じていた自分が馬鹿のようだった。

「一族を守るために子供を見限れと？ 僕を引き取って育ててくれた貴方が言うんですか！ その口でっ！」

「克依、私は小早川のトップに立つ者だ。子供一人と、一族、どちらか守れないとしたら多く守れる方を選ぶしかない」

「だからって、幸之助を施設に入れるんですか！ 私生児という理由で！」

「私生児だからだ！ 何故わからない！」

語気を荒らげる父親に、克依は口を噤む。

優秀で誰からも好かれるように育った克依は父親に反発した経験もなければ、こんな風に父親に怒鳴られる経験などなかった。

驚いて見ると、徹也はため息をつく。

「……いいか、克依。私も出来ることならば礼人の息子を引き取りたいと思っている。礼人は馬鹿な子だが私の大切な弟だ」

「では、何故」

「考えてみなさい。小早川は旧家で世間体を酷く気にする家柄だ。」

お前を榛名から引き取る際も酷く揉めた。それを見てきたお前なら分かるだろう」

「……はい」

確かに克依を引き取る際、揉めていたのを見ている。

まだ五歳足らずの子供だった記憶に残っている。

だから誰からも好かれるようにあろうと思ったのだ。少なくとも自分を引き取った父が他の親戚から悪く言われないようにと。実際克依の成績が優秀だったためにそれ以降の親戚の反発は少なかった。兄も姉も克依に対して優しく何かあれば庇ってくれた。だから克依は真っ直ぐ育ってきたのだ。もともと、それが姉を苦しめていたことなど、克依は知らなかったのだが。

「私生児である彼を引き取って、彼がどんな風に言われるのか分かっているか？ お前のように誰からも文句が出ないほどに優秀であるのならいい。だが、彼には虐待の後遺症ともとれる言語障害がある」

「……でも、それはこれからなくなるかもしれない」

「確かに。だが、あの瞳だ」

「外見で人を判断するなど……」

「違う。あれは、礼人と同じ瞳の色なんだ。お前は私と同じ虹彩をしているが、幸之助君は礼人と同じ。……小早川の人間が礼人を思い出さない訳がない。その上で、良い感情は抱かないだろう」

「……」

「小早川にいると不幸になる。酷い人間ばかりではないが、悪し様に言う物が必ずいる。無理に守ろうとして、道を誤るな、克依」

克依は目を伏せる。

「でも……彼には僕が必要なんだ」

父の目が克依を見据える。

「逆ではないと言い切れるか？」

「逆？」

「お前の自己満足のために彼が必要なのではないのかと聞いている

んだ」

「……父さん」

見透かされている。

父の言うことは正しい。

姉に対する、甥に対する贖罪の気持ち。それを満足させるために幸之助を引き取って育てようと考えたのではないだろうか。

自己満足のために引き取って、いたずらに傷つけることになったらそれは贖罪にすらならない。始終自分が側にいられば守れるだろう。数年はいい。でも克依にも仕事があるし、学校が始まったら側にいてやれない。

それで本当に守れると言えるだろうか。

でも、なら、何か出来ることはないだろうか。

彼のために。

弟の為に。

不意に父がため息をついた。

「……引き取るとは許可できない」

「はい……」

「だが、会つくらいならいいだろう。本当の兄弟であると言つことは言わないことが条件だ」

「父さん！」

父親は優しく微笑む。

「会ってあげなさい。幸之助君には家族のぬくもりというのが必要だろう。小早川に入れることは出来ないが、後見人になろう。それと、孤児院への援助は私がする」

「……父さん」

それ以上言葉が続かなかった。

涙でむせぶように克依はその場に泣き崩れた。

市原幸之助は病院を退院して以降、施設へと預けられた。

最初の頃こそ狼狽したような風だったが、すぐに慣れ友達と駆け回るほど元気になった。ただ言葉の方はおぼつかず、笑っているだけで殆ど口を開かない。たまにしゃべったとしても、他の子供に比べて随分と幼い印象を受けるしゃべり方ばかりをしていた。

それでも彼は良く笑う子供だった。

まるで虐待のことは忘れ去ってしまったかのように良く笑い、他の子供以上に活発だった。背や体格は同年代の子供よりもずっと小さかったが、そのハンデを感じさせないほどだった。

「幸之助君は明るくて良い子ですよ、小早川さん」

園長は眩しい者をみつめるように言う。

「ここの子供達は大抵どこか心を閉ざしています。ですが、幸之助君に関わった子供達はみるみる元気になっていきます」

「言葉が無くても通じ合う事があるんじゃないでしょうか」

「そうかもしれませんが、私にはあの子が天使の子のようにみえるんですよ」

幸之助の髪は柔らかくふわふわとしているために天使を連想させるのだろう。そう思ったが、園長は首を振る。

「あの子の周りに集まるのは人だけじゃないんですよ」

「というത്？」

「この前、施設を回る移動動物園が来たんです」

移動動物園の動物たちは人間に慣れているとはいえ、特定の誰かばかりに寄ると言うことはない。だが殆どの動物が幸之助にすりよってきた。

その勢いが強すぎて幸之助が転倒したために園長達は幸之助が襲われたのかと思って慌てたが、幸之助は声を立てて笑っていた。動物たちも彼をまるで仲間のようになじれついていたという。

それだけではなく、彼が何かで一人していると大抵野良猫や鳩たちが寄ってきていると言う。それはまるで動物たちと会話をしているようにも見えるという。

不思議な子供だった。

「園長先生！！ あ、克依兄ちゃんだ！ 何？ またコウに会いに来たの？」

「えー、克依お兄ちゃんきてるの？」

「あ、ほんとだ克依だ！ 克依！」

園長室に雪崩れ込んできた子供達は、克依の姿を見るなり彼を取り囲む。

既に何度も顔を合わせている為に克依の顔はちょっとしたヒーロ並みに有名になっている。克依が幸之助に会いに来ているというのはみんな知っているが、幸之助に限らず遊んでくれる上に、時折おやつなども持ってきてくれる事も知っていたので、子供達は克依が好きだった。

元々子供好きだった克依は取り囲まれて少し困った顔をしたが、悪い気分ではなかった。

「お、みんなそんなに引つ張らないで」

「克依遊ぼうぜ！」

「だーめ、克依兄ちゃんは私たちと遊ぶの！」

「何言ってるんだよ、克依兄ちゃんはコウに会いに来たんだってー」

「とと、園長、ちょっと僕、みんなと遊んできます」

「はい、行つてらっしゃい。みんな、小早川さんにあんまり迷惑かけちゃ駄目ですよ」

はい、と素直な返事が戻ってくる。

引つ張られるようにして克依が外に出ると遠くで幸之助が手を振っていた。

「あいつ、今日ずっと兄ちゃんが来るんだって言ってたんだぜ。当たったなー」

「そうなんだ？」

「いつもそうなんだぜ。克依兄ちゃんが来る時はいつもあいつ当てるんだ」

克依は仕事があるために曜日を指定して来ているわけではない。これる時に出来るだけ来るつもりでいるが、ずっとこれない時もある。今日は園長へ連絡を忘れていたから、園長との電話でのやりとりを聞いている訳ではないのだ。

それが幸之助の不思議な所。

「幸之助」

「かついー」

呼ばれると、幸之助は駆け足で克依の側まで寄り首に飛びつくように抱きついた。施設に来てだいぶ体重が増えたとはいえまだまだ軽い幸之助の身体を持ち上げて克依は肩の上に載せた。

「あー、コウばっかずっこいの！」

「お兄ちゃん、僕も僕も！」

「あはは、みんな一気には無理だから順番ね。……幸之助？ どうしたの？」

「……………」

幸之助はニコニコしながら地面を指を指す。

今まで幸之助がいた場所に「かつい」と平仮名が書かれている。

「幸之助、平仮名覚えたの？」

うん、と彼が頷く。

「コウくんってば自分の名前まだ書けないのに、克依兄ちゃんの名前だけかけるようになったんだね」

「え？ そうなの？」

にこにこ笑っている幸之助にその言葉が真実だというのがわかる。

嬉しかった。

自分の名前よりも先に、克依の名前を覚えてくれた。そしてちょっと誇らしげな彼の表情が嬉しい。

克依は幸之助を肩から降ろしぎゅっと抱きしめる。

「……ありがとう、何よりの贈り物だよ」
「あー」

喜んでくれると僕も嬉しい。

幸之助はそう言ったように聞こえた。

「え？ 幸之助が喧嘩？」

初めて園長の方から呼ばれて施設に行ったのは幸之助が小学校に入っただけのことだった。小学校で幸之助が喧嘩をしたと聞かされて俄に信じられなかった。

相変わらずたどたどしい口調だったが昔に比べて良く喋るようになった。相変わらず笑顔を絶やさず、人の痛みの分かる優しい子供だった。人を傷つけるような事はしないし、何より暴力を嫌う子供だった。

それが喧嘩と聞いてすぐに信じられなかった。

「正確には幸之助君をいじめた子供に烏が襲いかかって怪我をさせてしまったんです」

授業で家族の絵を描くことになったそうだった。

お父さんか、お母さんと言われて幸之助は真剣に誰かの絵を描いていたそうだった。そこまでは良かった。

幸之助の絵を見て隣の席に座っていた男児が「お前にはお父さんはいないだろう」と言い、いると言い張った幸之助と口論になったそうだった。頭に血の上った男児が幸之助の書いていた絵をぐちゃぐちゃに丸めてしまった。

とたん、幸之助の顔から笑顔が消えた。

『お前なんか！』

幸之助が叫んだ瞬間、空いていた窓から烏が飛び込んで幸之助をいじめていた男の子を襲ったのだという。

当然、幸之助の不思議な力を知らない学校は事故として処理をしたが、クラスの方は混乱した。入ってきたのが烏だったから余計にいけなかったのだろう。幸之助が悪魔だと、誰かが言いだし、それが感染して恐慌状態に陥ったのだ。

園長は幸之助の能力を理解している。だから、幸之助の仕業なの

だとすぐにわかった。怒ろうとしたが怒れなかったという。幸之助があまりにも気落ちしていたからだ。

だから、克依が呼ばれた。

「……今、幸之助は」

「部屋に籠もっています。誰とも口を聞こうとしなくて……」

「そうですか」

克依は幸之助の部屋に行く。集団で暮らす部屋だったが幸之助の雰囲気を押されてしまったのか、他の子はいなかった。

暗い顔をして蹲っている幸之助の手には白い画用紙が握られている。

「幸之助」

呼びかけるとびくつと幸之助が震えた。

「……………」

「こつちを向きなさい、幸之助。僕は今凄く怒っているんだ」

顔を掴んで真っ直ぐ自分を見つめさせると、彼は目を伏せる。

「めいわく……かけて、ごめんなさい……」

「そんなことで怒っているんじゃない。……ねえ、幸之助、どうして僕が怒ったか分かる？」

「……ぼくがあの子、傷つけたから？」

克依は首を振る。

「そうじゃない。確かに人を傷つけることは良くないよ。でもね、僕だって小さい頃に友達ととっくみあいの喧嘩とかしたから怒れないよ。僕が怒っているのは、幸之助が烏を使ったからだ」

幸之助には動物を懐かせるという力がある。

前に話をしたら、お願いすればみんな聞いてくれるのだと言っていた。言葉こそ分らないけれど、言いたいことがお互いに分かるのだと言った。

「烏は勝手に飛んできたのかも知れないけど、幸之助は強く願えば誰か聞いてくれること分かっていたはずだね？」

「……うん」

「それなのに、使った。その力は悪い力じゃないけれど、悪いようにも使える。烏は幸之助の友達？」

「うん、友達だよ」

「その友達に、幸之助は今日悪いことをさせてしまった。それは自分が悪いことをするよりもずっと悪いことなんだよ」

わかるね、と言うと幸之助は不安そうな表情のまま頷いた。

「だから、今度からは友達にそんなことさせちゃ駄目だ。……いい？　悪い事ってのはした分だけ自分に返ってくるんだ。僕は幸之助に悪いことが帰ってくるのは嫌だ。幸之助は友達に悪いことが返ってきて平気？」

ううん、と慌てたように首を振る。

良いわけがない。

優しい幸之助はそう答えた。

「幸之助はいつも笑顔でいるけど、それはどうして？」

幸之助は、必至に訴えるように言う。

「それは、みんな、えがお、返してくれるから」

「そう言うことだよ。良いことも悪いことも自分がしたただけ自分に返ってくる。だから、出来るだけ良いことしようね。……よし、お説教終わり」

ぱちんと幸之助の頬を両手で挟むようにたたく。

ちよつと驚いた様子だったが、克依が笑みを浮かべると幸之助も戸惑ったように少し笑った。

「……ねえ、幸之助、どうして怒ったりしたの？」

「お父さんの、顔、かこうと思った」

言って幸之助は克依にぐしゃぐしゃになった画用紙を渡す。

それは色とりどりに描かれた人の顔。

笑顔でいる人物は気のせいだろうか、克依の顔に見えた。

「お父さん、分からなくて、何度もかいたけど、かしい兄ちゃんの顔にしかならなかった」

「……」

「かつい兄ちゃんの顔、かいたのに、ぐちゃぐちゃにされて、嫌だった」

泣きたいのか笑いたいのか克依には分からなかった。

この子は、こんなにも自分を必要としてくれる。

ほんの僅かしか一緒にいてやれないのに。それでも慕ってくれる。

「……………幸之助」

泣き顔を見られるのが嫌で幸之助を抱きしめた。

抱きしめられた幸之助は少し驚いているようだった。

「かつい、兄？」

「……………幸之助がもう少し大人になったら、一緒に暮らそうか」

小早川とか関係なく、幸之助が自分で選べる年齢になったら。

酷いことを言われても立ち直れる位に強くなったら。

「いっしょ？」

「そう、その時まで幸之助が嫌じゃなかったら、一緒に暮らそう。」

……………本当の家族になろう」

必要なのは父が言ったとおり自分になるだろう。

姉のこととか、鷹取の甥のことは関係ない。

自分に取ってどれだけ幸之助が心の支えなのかを知る。

「……………本当？」

「ああ、約束する。もう少し大人になったら、一緒に暮らそう」

幸之助が微笑んだ。

無邪気で明るい笑顔。

この笑顔を守るためなら何でも出来る。

そう思って真剣に交わされた二人の約束は守られることなく打ち砕かれることになることを二人はまだ予測も出来ていなかった。

その日はいつになく天気の良い日だった。
澄み渡った空は雲一つ無い。

怖いくらいの天気だった。

暫くぶりに施設を訪れると幸之助は門の前でしゃがみ込み猫と何かを喋っていた。そう言えば克依が最初に幸之助と会った時、猫がやけに幸之助を心配していた事を思い出す。

「幸之助」

「かつい兄ちゃん」

「猫とおしゃべり？」

「うん、ぼくは猫とおしゃべりできるんだ。……ないしょだよ、猫たちもかつい兄ちゃんならいいって、ね？」

話しかけるように幸之助が下を向くと、猫が彼の足下にじゃれつきながら頷く。

「猫とは？ 他の動物とおしゃべり出来るんじゃないのか？」

「どうぶつの言葉は何となく分かるけど、猫の言葉はしっかりわかるんだよ。だから、ないしょなんだって」

猫たちに言われたのだろうか。

自分たちと会話が出来るとは内緒だと。

それにどんな意味があるのか分からないが、幸之助がそういうのだから、克依もそれを信じた。

悪戯っぽく口元に指を当てた。

「分かった。猫と、幸之助と、僕の秘密だね？」

「うん、秘密」

幸之助も克依を真似て口元に指を当てた。

「かつい兄ちゃん、今日はずっといられるの？」

「うーん、仕事が入らなければね」

「……いっしょにいて、今日は」

「うん？」

「あぶないから、って猫が言ってる」

「危ない？」

「わからなけど」

この時、幸之助が猫たちにもっと積極的に話を聞いていれば、克依がその言葉を真剣に取り合っていれば、克依の携帯電話に緊急事態の連絡が入ってこなければ運命はどこかで変わっていたのかも知れない。

けれど、それは起こってしまった。

その皮肉な運命は、その日回避したとしてもいつかまた起こっていたのだろうか。

今となつては誰にも分からないことだ。

克依はその時責任のある仕事をしていた。だから、緊急連絡が入った時点で帰る選択肢しかなかったのだ。

珍しく帰らないでと泣く幸之助を宥めて克依は帰宅を急いでいた。幸之助の言葉は気になつていたが、だからといってどちらも捨てられなかった。幸之助と未来一緒に過ごすためにお金も欲しかったし、施設の方へはまた遊びに来られると思っていたのだ。

（……ごめん、幸之助）

今度埋め合わせるから。

そう思い路地を曲がった時だった。

人が近づいてくるのを感じると同時に、突然腹部が燃え上がったような感覚に襲われる。

無論、そこに火の手はない。

あるのは腹部に奇妙に突き刺さった突起物。

「……………」

何が起こったのか理解する前に足下が崩れた。

屍餅を付いて、そこにいる人物を見る。

女だった。

どこかで見覚えのある女。

誰だっただろうか。

「……えして」

「？」

「幸之助を返して！」

言葉で気付いた。

見た覚えのあるはずだ。

彼女は幸之助の母親。

「市……原……さん……」

幸之助を助けた後、彼女は警察に逮捕された。

小早川が彼の後見人になることで、彼女から親権をとったはずだ。彼女もそれを了承し、幸之助には近づかないという処置がされていたはずだ。

なのに何故。

「あの子がいなければ、礼人が戻って来ても、繋がりが無い。幸之助を返して！」

言っている意味が良く分からなかった。

腹部が熱い。

触れるとぬるりとした感触があった。

「かしい兄ちゃん！」

幸之助の声。

猫が幸之助の前を走ってくる。

「来るな！」

叫んでも幸之助は止まらなかった。

市原立花が嬉々とした表情を浮かべる。

何故突然彼女がここに来たのだろう。

幸之助があ施設のにいることは知らされていなかったはずなのに。

「幸之助！ いらっしゃい！ ママ迎えに来たのよ！」

ぴたり、と立ち止まった気配を感じた。

暗がりにはんやりと幸之助の姿が映る。彼の目の前で女を威嚇するように猫が牙を剥いていた。

幸之助はただ驚いたように女を見て、そしてその足下に転がる克依を見る。

見ないでくれと願った。

けれど幸之助は克依を見ていた。血にまみれ街灯に照らされ青い顔をしている克依の姿を。

「…………お前…………！ かつい兄ちゃんに何をした！」

ぞくりと背が冷えるような声。

子供が出す声ではない。

「よせ…………止めるんだ…………之助」

女は取り繕うように言う。

「この男が悪いのよ。コウちゃんと私の仲を引き裂こうとするから

…………」

「うるさい、お前なんか知らない！」

幸之助の意思か、それとも猫の意思か。

猫が女に向かって飛びかかる。

顔に爪を立てられて女が呻きながら猫を振り払う。地面ギリギリで回転した猫は再び体勢を立て直して女に向かって唸った。

「よくも…………かつい兄ちゃんを…………お前なんか、死んじゃえ！」

周囲がとたんに騒がしくなった。

そこら中の犬達が威嚇するように吠え出す。鳥たちもまた騒ぎ出した。町中にいる人以外の動物たちが一斉に騒ぎ出し、一帯は異様な雰囲気包まれた。

（…………駄目、だ）

意識が朦朧とする。

けれど、伝えなければならない。

（お願いだ、どうか、今だけ、意識を持っていかなくてくれ）

克依は立ち上がる。

足下がふらついたが、何とか歩けないこともなかった。不思議と

痛みを感じなかったが、刺された側の足が痺れてしまったように思うように動いてくれなかった。

「幸之助」

呼びかける。

今、自分は微笑めているだろうか。

おんなは周りの雰囲気と克依の様子に怯えたように悲鳴を上げ、その場に尻餅をついた。気にせずに克依は幸之助の方に近づく。

「駄目だ、幸之助。恨みの言葉は、自分に返ってくるって教えただらう?」

「でも、かつい兄ちゃん」

「僕は大丈夫。ほら、痛くない、笑っているだらう?」

言って満面の笑みを浮かべる。

微笑めているだらうか。

表情が歪んでいないだろうか。

「人を恨んだら駄目だよ、幸之助。僕は君が人に恨まれるのは嫌だ」

「でも……でも……!」

「幸之助は、僕が誰か恨んで、恨まれても平気?」

「平気じゃ、ない……でも」

「それと同じ。人を恨んで、人を傷つけるために力を使ったら駄目だよ。幸之助のその力は、みんなを幸せにする力なんだ」

近づく、幸之助の顔が涙で濡れているのに気が付く。

泣くな。

お前が泣くと、こっちまで泣きなくなるだらう?

「もしも、どうしても誰か恨みたくなったら、僕を恨むんだ、幸之助。僕なら、その全部、幸せで返してやれるから」

頬に触れると、彼の涙が赤く染まる。

この子から沢山のものをもらった。

自分はその分返せただらうか。

多分まだ足りない。

一生かかっても足りないくらい彼からもらった。

(……父さん、泣くかな。……ごめん、今、幸之助のことしか考えられない)

朦朧としている。

今、目を閉じたら、二度と開けない気がした。
後もう少し、もう少し伝えたいことがある。

「君が笑っていてくれるなら、僕は、空だって飛べる」
弟とか、血縁とか、関係のないことだ。

この子が好きだ。

家族としても、一人の人間としても。

優しくて人を思いやれる子。

だから動物にも好かれる。

「かつい兄ちゃん……」

「大好きだよ、幸之助。……だから、僕は死なない。君の側にいるから」

ごめんね、君の言葉嘘だと思っていたわけじゃないけど、大丈夫だっと思っていないで今日は帰らずにいれば運命変わったのかも知れないけど、こんな事になっちゃって。

大丈夫だって、一緒にいるって、嘘付いてごめんね。
でもね、一つだけ、後悔していないよ。

だから、僕、今、笑っているだろう？

「記憶障害ですか？」

男が問いかけると園長はどうしようもないと言う風に目を伏せた。その目には少し涙がにじんでいる。

「そうです。小早川克依さんの事に関してだけ何も覚えていないんです」

言うだけ言つて園長は堪えるようにハンカチを目頭に押し当てた。克依が病院に運び込まれ、そのまま帰らぬ人になった日、病院で幸之助も意識を失った。目が覚めた時、奇妙な程に笑顔な幸之助は克依のことだけすっかり忘れていた。まるで全て抜け落ちてしまつたかのように。

それだけシヨックな出来事だつたのだろう。

彼が以前、虐待されていた事実を思い出せなかったように、最も辛い記憶として頭の中で封印してしまつたのだろう。そうでなければ幼い彼には耐えられないことだつたのだ。

一緒に暮らそうといってくれた大切な人が、目の前で殺されたのだから。

園長にとって克依が殺された事以上に、克依の記憶まで失つてしまつた幸之助がシヨックで仕方がなかった。

子供達には克依の事は伏せられた。子供達に良くしてくれた青年だつたから、幸之助と同じようにシヨックを受ける子供もいると思つたからだ。ニュースも出来るだけ流さず、克依は仕事で遠くに行くことになつたと伝えた。

記憶障害を煩つて、ひとりぼっちになつた彼を引き取りたいと言つてきた男がいた。

既に六十を超えた皺の多くなつた顔だったが、若い頃は相当の美男子だつたと想像できる整つた顔立ちをした老人だつた。右手の薬

指と小指が無く、足も歩く時引きずるようにして歩く男だったが背筋が伸びているため、立ち居振る舞いが非常に美しく見える。事故で失ってしまった、若い頃に日舞をやっていたと男は説明をした。

彼は幸之助に関することを全て聞いた後、それでも引き取る意思があると告げ、後見人である小早川が呼ばれた。

小早川徹也が現れると男は背筋を伸ばして頭を下げた。

青みのかかった黒髪が肩から少し流れた。

括っているために短く見えた髪は長く、腰の近くまで伸ばされていた。

「……この度はご愁傷様です」

「ご丁寧に恐れ入ります。小早川徹也です」

「梶川礼人と申します」

名乗られて小早川が名前に反応する。

「……礼人？」

「何か？」

「いえ……私の弟も同じ名前でしたので」

「そうですか。……何か縁を感じますね」

梶川はそう言ったが、小早川の内心は複雑だった。礼人の息子を引き取りたいと言ってきた礼人という男。嫌でも何かが繋がってしまふ。むしろ因果めいたものを感じてしまった。

梶川の年齢を考えて礼人である可能性は低い。目の色も違う。それなのに、その目の鋭さが、どうにも弟のもののように見えて仕方がなかったのだ。どこか面差しも似ている。もしも弟が成長してこの位の年齢になっていたらこんな風になっていたのではと思ってしまう。

「失礼ですが、何故わざわざ幸之助を引き取りたいと？」

「おや、小早川さんは反対ですか」

「いえ……そういう訳では……」

「分かります。義理とはいえ息子さんが最後まで守ろうとした子供です。滅多な人間には渡したくないでしょう。まして私は障害者で

あるし、年も随分と上だ。幸之助君が大人になるよりも前に私の方が死んでしまうこともあるかもしれない。そうならばあの子は再びひとりぼっちになる。あなたはそれを懸念している」

「……………はい」

小早川は素直に頷いた。

自分の所で引き取れば不幸になるだろう。克依の過ごしたものが残る場所では何かの拍子に思い出して辛い思いをするかもしれない。そうでなくても、小早川の中では克依は誰のことも分らない子供のせいで死んだと嫌な風に言われている。

そんな汚い言葉を聞かせることは、克依の意思に反する。あれだけ反対をしておいて今更引き取るなんて話をしたら克依は激怒するのだろう。

克依が刺されたと聞いた時、彼は幸之助を酷く憎んだ。彼のせいで無いことは分かっているにも彼に関わらなければ克依は死ななくて住んだのだと思うと憎まずにいられなかったのだ。

だが、克依の遺体と出会った時、その考えは消えた。

微笑んでいたのだ。

刺されて苦しかったはずの彼が、穏やかな顔でいたのだ。それが何を意味するのか彼には把握出来なかったが、何かメッセージのように思えたのだ。幸之助をよろしくと、幸せになるようにはかってくれと。

「まずはこんな身でも家族を養えるくらいの経済力はあると伝えておきます。考えたくありませんが、私に万一の事があっても、幸之助君は困らないくらいに財産も残せるでしょう。私は家族を失って久しい、だから家族が欲しいというのが一番の理由です」

「……………失礼ですが、そではますます彼でなくともと思いますが」
他に育てやすい子はいくらでもいる。

幸之助はいつか爆発してしまうかも知れない爆弾を抱えている。今ならまだいいが、もう少し成長してかれがフラッシュバックで暴れ出したとしたら、梶川の力では抑えきれないだろう。

指摘すると、確かにと彼は頷いた。

「それでも、私は彼を一目見た時から引き取りたいと強く願いました。幸之助君が語りかけてくる……いえ、あるいは克依さんかもしれません。よろしく頼むと、彼を幸せにして欲しいと願われた気がしたんです」

「……………」

「だから、どうしても彼を、と。辛いのなら共に分かち合えばいい。私は、そう思ってます」

その目は意思の強い瞳だった。

自分と決別してでも幸之助を育てたいと言ってきた克依に似ている。

不安で無いわけがない。

ただ信じてみたいとも思った。

「……どうか、彼をよろしくお願いします」

どちらにしても、自分では幸せにしてあげることが出来ない。小早川には小早川家を守らなければならないという義務がある。

それは投げ出してしまつて良いほど自分にとってどうでもいいものではない。

「私も彼も家族が欲しいんです。全てが上手く行くとは限りませんが、出来うる限り彼を幸せにすると約束します」

梶川は頭を深く下げた。

年上の男に頼むのが奇妙な感じもしたが、幸之助自身、梶川に凄く懐いていると聞く。ならば幸せになるだろうと思った。

「……梶川さん」

「何でしょう」

「貴方と同じ名前の弟なんです、実はあの子の父親なんです」

梶川は驚いたように眉を上げた。

「そうなんですか」

「酷い子です。昔から自分勝手な子でした」

「苦労、……なされたでしょう」

「いいえ。私は仕事と言うことを盾にして苦労しない道を選んできました。今更あの時ひっぱたいてでも家に連れて帰ってあげればと思います。そうすれば道が変わって克依はまだ生きていたかも知れない」

会って間もない男にそんな話をするのは、らしくないと思った。
でもせずにはいらなかった。

梶川は諭すように言う。

「或いはもっと早くに亡くなっていたのかも知れませんが。人生なんて、その時になってみないと分からないものですよ」

「ええ、そうです。……その通りです。あの子がどこかへ行っていないければ克依は私の息子ではなかったし、幸之助も生まれていません。あの時あしてあげればと思うことは今の全てを否定することにもなりかねない」

そう分かつているが、思わずにいられない。

礼人を真剣に見つめていれば、何か変わっただろうかと。

「……おかしいですよ。こんな年になっても幼い弟の手を引いて夏祭りに行く夢を見るんです。あの子は行きたいとせがんだけれど私は一度も連れて行ってあげられなかった。それを後悔しているのかもしれない」

「私もそう言う夢を見ます。今の私よりずっと幼い兄が、私を叱っている夢です。……小早川さんにとって、礼人さんはどんな弟だったんですか？」

小早川は笑う。

遠い記憶を見つめるような表情で。

「疎ましかった。いつも手を煩わせて、ろくでもないと思っていた。でも……」

「でも？」

「嫌いだと思った事は一度もありませんでした。……梶川さんは、その、叱るお兄さんをどう思っていました？」

そうですね、と梶川も遠くを見つめるような表情を浮かべる。

「私も……嫌いだと思ったことは一度もなかったように思います。結局、私にとって兄は、父親のような存在でした。越えたくても、越えられない壁で、本当は心のどこかで越えなくてもいいと思っ
ている、そんな存在でした」

弟も自分のことをそう思ってくれていただろうか。

自分たち兄弟も父親を早くに亡くしたせいで、自分にとって弟は子供のようだった。弟から見れば兄ではなく父だったのかもしれない。

嫌いだと思った事はないだろうか。

無関心を決め込んでいる癖にことある事に説教をしていた自分を。弟が道を間違えたなら、自分にも必ず要因がある。だから、こんな事になったしまったのは彼自身のせいでもある。

過去の自分を責めても変わらない。弟の息子である克依はきっとそんなことを気にしていないで前を向けと発破を掛けるだろう。

そう言う子だった。

真っ直ぐで、曲がったことを知らない優しい子。

(……どちらが父か分からないな)

今この年になって弟に出会えたなら、少し変わるかも知れない。

もしもう一度会えたなら、今度は……。

「梶川さんはいい人だよ」

学校の帰り道を歩きながら幸之助は呟いた。

彼の側には人の姿が無かったが、代わりに白と黒の猫が彼の側を付いて歩いていた。

猫が心配そうににやあと鳴く。

「ひとりぼっちにしないって、約束してくれたんだ」

幸之助が足を止めると、猫たちが周りで飛び跳ねる。にやあにやあと鳴く二匹は必至で何かを訴えているように見えた。

「……うん、でも」

幸之助はしゃがむ。

「いいんだ。かつい兄ちゃんのは、もういいんだ」

猫たちを撫でると猫たちは彼を見上げる。

「……良くないけど、いいんだ。僕はね、忘れていないと笑うことも出来なくなるから」

克依は最後に笑っていた。

笑っていて欲しいと、人を恨んじや駄目だつて言った。

押しつぶされそうだった。

克依を刺した女のこと憎くてたまらなかった。でも、彼女を憎んで復讐することを克依は望んではない。復讐することは克依の為ではなく自分のためになってしまう。そんなことで大切な克依を悲しませたくなかった。

恨まない。

恨むことが出来ない。

助けられなかった、もつと真剣に引き留めていれば良かったと自分の事を憎む事すら、克依は悲しむだろう。

「ひどいよね」

涙で猫の顔が揺らいだ。

誰かを憎むことも出来ない。人を恨むことは克依が最も嫌がることだ。だから、恨めない。彼は恨むなら自分を恨めといったのだ。幸之助に克依を恨むなんて事は出来ない。

克依のことを酷いと思った。残酷だと思った。でも、克依を恨むことなんて幸之助には出来ない。

だったら、忘れた振りをするしかなかった。

押しつぶされそうな気持ちを紛らわすように笑っているしかかった。誰かが自分の事を哀れむように見るのも嫌だった。

自分は消して可哀想な子供じゃない。

克依は最後の最後まで微笑んでいた。

あの瞬間、一瞬でも彼が苦痛の表情を浮かべたら、幸之助は母親と名乗ったあの女を殺してしまっていた。でも、彼は笑顔だったのだ。

それが全ての理由。

「梶川さんね、僕がかつい兄ちゃんのこと覚えていること多分知っているよ。でも、気付かないふりをしてくれた。いい人だよ、だから僕は向こうに行っても大丈夫」

外国へ行くのだと聞いた。

自分の仕事を手伝って欲しいと言われた。嫌なことはやらなくても良いけれど、出来れば自分の仕事を手伝って欲しいと。

猫たちは止めると言う。

梶川の仕事の内容を知っている訳ではないが、彼が悪い人と言うわけではないが、何か普通ではない匂いがすると言うのだ。

それは幸之助も分かっていた。

「……でも、僕は行くんだ。幸せになりたい……ううん、幸せになるんだ。だから行くよ。一緒にいてくれるって約束してくれたから、多分それだけで僕は進める」

納得できない、と猫が言った。

幸之助を不幸にするかもしれないのに、そんな男と一緒に行かせたくないのだと。でも、だけど、幸之助が本当に行きたいのなら、

自分たちには止められないと。

幸之助は笑う。

「ありがとう」

心配してくれたことが嬉しい。

さよならは言わないからな、と猫が格好付けて鳴く。

「うん、じゃあ僕も言わない」

幸之助の手元から離れた二匹は、鈴の音色を奏でながらどこかへと消えていった。

足音が聞こえる。

少し引きずるような足取り。

振り向かなくても分かる。梶川だ。

「……梶川さん！」

笑顔で振り向くと、梶川も微笑む。

「良く私だつて分かったね」

「うん、足音ですぐに分かったよ」

梶川の瞳が少し細められた。

幸之助は少し不思議に思う。

前々から思っていたが梶川の瞳の色はどこか不自然だ。猫たちに聞くと「カラーコンタクトレンズ」を入れているのではと言った。

どうしてそこまでして瞳の色を変えているのだろうか。

聞いたら教えてくれるだろうか。

それに、どうして足が悪い振りをしているのか、どうしてそんなに年寄りみたいな外見をしているのか、聞きたかった。

でも、梶川の笑みを見ているとどうでも良いことのように思えてきた。

この人はどこか克依に似ている。

笑っていないと少し怖そうに見えるけれど、微笑み方がどこか克依に似ているのだ。この人の笑顔が好きだ。

ずっと笑っていて欲しい。

克依の役に立てなかった分、この人の役に立ちたい。

指が二本足りない大きい手が、幸之助の髪を撫でる。
優しい手。

お父さんになる人の温かい手。
克依のことは忘れられない。
でも、きつと頑張れる。

幸せになれるから。

「梶川さん、あのね……」

話したいことがいっぱいある。

猫のことは内緒で、克依のことはまだ泣いてしまってから話せないけれど、今までのこと、いっぱい話したいことがあった。

聞いてくれるだろう。

自分を引き取ってくれるこの優しい人は、克依の笑顔に似たその優しい顔で聞いてくれる。

何も出来ないかも知れないけれど、少しでも役に立てるように頑張るから。

（だから）

お父さんと呼んでもいいですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0785s/>

父親の肖像

2011年4月2日21時10分発行